Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

「笹川杯作文コンクール 2018-感知日本」

中国青年の視点から見た中日友好

入賞作品

公益財団法人日本科学協会
業務部 国際交流チーム

目　次

★「笹川杯作文コンクール 2018-感知日本」入賞作品

★優勝賞

合肥学院　史春艶 2

廈門大学　鄭羽揚 3

華中師範大学　王　珺 4

浙江中医薬大学濱江学院　孫　斌 5

★二等賞

深圳職業技術学院応用外国語学院　鄒　欣 6

東華大学外国語学院　呉元欽 7

★三等賞

中央財経大学外語学院　馬智民 8

東北財経大学国際商務外語学院　郭　盼 9

★優秀賞

南京郵電大学外国語学院　何佳宜 10

嶺南師範学院外国語学院　陳姝諭 11

斉斉哈爾大学外国語学院　李玲妤 12

中日国際フェリー株式会社　田梅傑 13

首都師範大学外国語学院　高夢雨 15

広東外語外貿大学　張驚晨 16

長安大学　上官雪妍 17

四川外国語大学　鄒文嘉 18

上海海事大学法学院　徐暁瀛 19

大連工業大学外国語学院　郭暁麗 20

★優勝賞

「平和と友好　中日関係の原点と未来 詩吟講習会に思うこと」

史春艶　（合肥学院）

「月落ち烏啼きて霜天に満つ。江楓漁火愁眠に対す。

姑蘇城外の寒山寺。夜半の鐘声客船に到る。」

1300 年前に、中国の詩人、張継が詠んだこの『楓橋夜泊』という詩は中国から日本に伝わった。小学生の時から、この詩をすらすら暗唱できたが、日本語で読むとは思ったことがない。しかし、日本語で読めるだけではなく、さらに歌うこともできるとは、本当に不思議だ。

あれは、大学二年生のことだった。その時、日本吟道学院の古田先生がわが大学にいらっしゃい、詩吟講習会を開催した。ショルダーバッグを背負って、髪がきちんと整え、目は輝かしい光を発して、私たちに向けて歩いてきた。矍鑠たるお年寄りだった。もう 75 歳の年配者だと聞いて、驚いたほか、私たちとキャップがあるのかなと思ったが、それがよけいな心配だったと後になって分かった。

しらが混じりの髪、慈愛に満ちていた目線、口角に浮かぶ微笑みを見た瞬間、その優しさに包まれた。窓から差し込んだ日差しの下、古田先生は手が震えながらも、小さいエレクトーンを弾きながら、

「月落ち烏啼きて……」

と力強い声で漢詩を吟じ始めた。

子供の時代から淀みなく上手に暗唱できる漢詩を日本語で歌うなんて、なんとも奇妙な感覚だった。恥ずかしいと思うが、暗唱できる私は詩人の心に触れられない、というよりも、触れたくない。でも、先生が吟じた『楓橋夜泊』を聞いた後、小舟から蒼い月を眺めながら寒山寺の鐘声や寂しい烏の声を聞いている詩人の姿が目に浮かぶようだった。先生はきっと詩人の故郷への懐かしさを思いながら吟じたからだろう。

詩吟に慣れていないから、私たちは最初余り理解できなかったが、先生はずっと励ましてくださり、繰り返し繰り返し、教えてくださった。「私の願いは、いろいろな目的から日本語を話す必要のある学生さん達が、はっきりと聞き取れる日本語の発音ができるようになることです。詩吟は、そのために最も力ある活動です。」と先生が言ってくださった。中

国学生の日本語の発音を少しでも上手にさせるために、先生はずっと中国の各地を回って詩吟を教えている。先生の白髪を見ながら、あちこち奔走する先生の姿を想像すると、なにやら異国のお年寄りの真心を深く感じずにはいられない。

別れ際、先生はこんなことを言ってくださった。「私たち日本人は中国の人たちをとても尊重しています。中国からたくさんの宝を日本人は頂いたからです。これから、皆さんは日本語を勉強して、中日文化の架け橋になって、どんどん多くの中国の宝を日本に伝え、日本文化を中国に持ってきてください。古代の中国の詩と日本の音楽を組み合わせると、こんなに素晴らしい詩吟が出来ましたね。それでは、現在の中日文化を融合させると、どんなに美しい宝が生み出されるのでしょうか。皆さん、ぜひ見せてくださいね。」

今の私はもう四年生になった。今年の９月、古田先生は再びいらっしゃって、後輩に詩吟を教えてくださった。歳を重ねながら、詩吟を教えることに一層の情熱を傾けている。中日の交流に取り込んでいる先生の様子を見ると、鑑真、小野妹子、阿倍仲麻呂、栄西など中日友好に必死に取り込んだ有名人が思い出された。先生は今日の中日友好交流の使者と言ってもいいだろう。

隋唐の時代から、中日の友好交流が始まった。そして鑑真、小野妹子などの使者のおかげで、長年にわたって両国には深い絆を結んできた。これは中日友好の原点だと言えよう。今日は、古田先生のように、中日友好に自分の一生を捧げた人は数えきれないほど多くいるから、中日間の「絆」は「き」っても切れない関係、「ず」っと親しみ合う隣国、「な」が年流していく友情だというふうに理解してもいいだろう。だからこそ、中日友好の未来はきっと明るいと固く信じている。

「私と日本」

鄭羽揚　（廈門大学）

大きなスーツケースを引きずって、成田空港の電車乗り場でうろうろして、行き交う人々の口からこぼれる日本語を耳にして初めて、再び日本の土地に立ったという実感が湧いてきた。

前回日本に行ったのは三年前のことだった。あの頃の私はまだ日本語を流暢に話せず、中国と異なる習慣にも慣れず、異郷感満載の日本社会

で窮屈さを感じていた。そして何よりも、浅草寺で思いもよらず「凶」のおみくじを引いてしまったのがショックだった。おみくじの結果など、単なる偶然に過ぎないけれど、数々の小さな失敗が積み重なって、挫折感に変わり、じわじわと心を侵食していった。日本という国は私にやさしくないんだなあと思わずにはいられなかった。これから大学で四年間も日本語を勉強しなければいけないと考えると、うまくいくのだろうかと、不安でならなかった。

だけど、そんな不安の裏返しに、今までの日本語の勉強は順調だっただけでなく、楽しささえも感じていた。おみくじの恨みがあるにもかかわらず、言葉の勉強を通じ、日本という国を知れば知るほど好きになってきた。

そして今度、大学の卒業を控えて、私はまた日本へ旅立った。前回と比べ、さすがにもう言葉に問題はなく、エスカレーターで左に立つなどのルールにももう戸惑わない。前回より自由に行動できる旅行は楽しい。だがしかし、一つだけ気になることがあった。時に流されすでに色褪せて気にしなくなったかと思っていた「凶」事件である。長谷寺のあの立派な観音像の前のおみくじ箱を見たとたん、ふと思い出してしまったのだ。リベンジするなら、今だ。

そう思い、両手を合わせ、目の前の観音様に静かに祈った。そうしたら、妙に緊張し始めた。三年間、日本語を習い続け、日本人と何人か知り合いになり、それで日本を知ったつもりになった私を、日本は受け入れてくれるだろうか。超自然的力に求めるのは理屈に合わないけれど、答えがこれから引くおみくじに宿っている気がした。期待の分だけ不安も大きかった。もし今度も凶が出てきてしまったら、心が折れそう。

やっと心を決め、私は深呼吸をして、手をおみくじ箱へ伸ばした。微かに震えながら、手に取った紙を開いて目を凝らしてみたら、

「長谷寺観音御籤　第六十八　吉」

と大きく書いてあった。

一瞬、呼吸を忘れた。だけど、予想していた喜びはなかった。代わりに、満足なのか安堵なのか、形容しようがない、喜びよりも暖かい気持ちが胸いっぱいに満ちた。

思えば、私は子供の頃からずっと、日本に魅せられてきた。最初はアニメに惹きつけられ、それをきっかけに日本語の独学をはじめ、そのうち、なんと日本語が専門になってしまって、そして今は日本への留学を目指している。適切な喩えかどうかわからないけれど、まるで日本に長い間片想いをしてきたようだ。そんな風に追い続づけてきた日本がようやく振り向いてくれた、努力が報われたんだなあ、と。

しばらくそんな思いにふけった後、私は観音様に深く一礼をし、長谷寺を去った。

帰国したら、二度目の日本旅行が幕を閉じるけれど、私と日本の関係はこれで終わりではない。これからも長い間、日本とお付き合いしていくのだろう。この一枚の籤を節目に、何か新しいことを始めたい。一方的に日本を追うのではなく、些細な事でもいいから、日本に何か影響を与えよう。周りの日本人に本当の中国を知ってもらって、そして私が日本を知ることで好きになったように、中国のことを好きになってもらえたら、「吉」を引くこと以上に満たされるだろう。

そんな自分を励ますため、最後に籤の文章を記しておこう。

「異夢生英傑　前来事可疑　芳菲春日暖　依舊発残枝」

（大意：あの悪夢はいったい何だったのだろうか、花の香りが春の暖かさに満ちて、枯れた木にも花が咲いている。）

「私と日本」

王珺　（華中師範大学）

なかなか言葉で表現できないのが縁というものです。私が日本と出会ったことがまさにその通りです。

日本とのつながりは、日本の文房具への関心から始まりました。一つの日本の映画から話を始めたいと思います。日本の映画「ビリギャル」が中国で上演されたとき、あまり人気がありませんでした。しかし、映画に出てきた様々な面白い文房具が中国で流行するようになりました。まさに日本の文房具の総動員といえます。様々なノートやペンなどの文房具を見たとき、あまりにも可愛くて、目線がスクリーンから離れられなくなりました。映画を見てから、日本の文房具に夢中になりました。日本の文化を知るようになったのもそのころからです。

日本は、不思議な国です。小さな文房具でも、奇抜なアイデアを入れ込んでいます。日本人は生活でデザイン感と人間性と実用性を求めています。それらが日本人の長所の一つです。素晴らしい物事は人々の平凡な生活にいつも刺激を与えてくれたりします。その物事を静かにみているだけで心が癒されます。ちょっとしたひと手間、あるいはちょっとし

たデザインを加えるだけで、使っている人の心を幸せで満ち溢れるようにするのが日本の「職人の精神」ではないかと思います。

「ビリギャル」を見てから、映画を通じてではなく、直接日本を体験したくなりました。

幸運にも今年の夏休みにその機会に恵まれました。日本に滞在したのは数日だけでしたが、この国で私のパラダイスを見つけました。それは文房具屋です。本当に天国のようで楽しいひと時を味わいました。私たちの町にもこのような場所があったらどんなにいいだろうと思いました。一日の仕事が終わって家に帰る途中、文房具屋に寄ります。仕事での悩みなど全部忘れて、心を

安らぎます。遠くに行かなくても、旅行する気分になります。

近年、電子製品の普及により、文房具の存在と販売に大きな影響が及んでいます。日本は情報化と電子化が進んでいる国です。しかし、日本の文房具はほかの国のように電子製品に押されることはありません。むしろ、文房具がとてもいいというわさがネットで広がり、世界各国の人々が日本に訪れるとき必ず買うものになりました。例えば、日本で生まれたパイロットの消せるペンは観光客が必ず買う文房具だと言っても過言ではありません。デパートや空港、どこでも買えます。初めて消せるペンを使った時の衝撃は、今でも覚えています。ボールペンで書いた文字が消せるという奇想天外な発想は今まで考えたこともありません。しかし、その逆手を取ることで大成功したのです。このようなアイデアは偶発的だと考える人がいるかもしれませんが、私はそう思いません。パイロット会社は成立してから、ずっと文房具だけを集中して開発し、販売してきました。一つの商品を恐ろしいほどよく知り、また、それを使っている人々の需要をよく理解しているからこそ、成功した商品を開発することができたのではないでしょうか。

情報化が進んでいる今現在、儲かるというわさが立つ領域にみんなぞっこむ傾向があります。「金儲け」という考えだけでは、自分を貫くことができません。信念がなければ、すぐ時代の波に飲み込まれます。パイロット会社の「書くという文化を次世代に伝えるために」というモットーを見ると、すぐそれがわかります。

現在の中国では、一攫千金の企業も多いですが、すぐつぶれる会社も少なくないです。私たちが足りないのはまさにこのような信念ではないかと思います。このような信念を持つことにより、金儲けだけでなく、お客様の立場から物事が考えられるのではないでしょうか。

日本の文房具に対する愛はこれからも深まっていくでしょう。しかし、私が本当に願っているのは、このような日本企業の「職人の精神」を中国の企業にも伝え、今よりもって精工で美しい本国の文房具を見ることです。日本の文房具だけでなく、中国の文房具、世

界各国の文房具が並んでいるグローバル文房具屋さん。旅に出なくても世界を感じることができる文房具屋さんが身近にあったら、どんなにいいでしょう。

「漢方薬から見えた日本の素晴らしさ 」

孫斌　（浙江中医薬大学濱江学院）

私の専門は「日本語」ではなく、中国の伝統的な生薬や薬草などを研究する「中薬学」だ。一見すると、中国の伝統文化を代表する「中薬」は日本と何の関係もないようだが、実は深く関わっている。

大学二年生の時、ある日本人の教授が私の大学を訪問し、日本の漢方事情について講演した。深く感銘を受け、四年生になった今でも、その内容ははっきりと覚えている。

唐の時代、鑑真が中国の医学をはじめとする多彩な文化を日本にもたらしたことに伴い、中薬もだんだん日本で広がっていった。江戸時代になると、西洋か ら伝わってきた「蘭方」と区別するため、日本人は従来の中国医学を「漢方」と呼び始めた。日本の漢方は中国発祥だが、独自の理論や体系を形成し、大きな発展を遂げた。現在、日本の漢方薬は世界市場でおよそ 80%のシェアを占めていて、圧倒的に中国を超えている。

それが教授の話のあらましだった。私は驚愕を隠せなかった。「80%ってどういうこと？中国は漢方の本家なのに、何で日本製はそんなに売れているの？中薬はいったいどこがダメなの？」と私は頭の中で何度も問いながら、ネットや教科書を頼りに答えを探ってみた。

タイレノールやアスピリンといった化学薬品は化学物質の合成によって得られるのだが、漢方の場合はそうはいかない。漢方薬は複数の生薬を組み合わせた方剤のため、一つの薬には多くの有効成分がある。しかし、一本の小さな薬草にも気が遠くなるような複雑な成分が含まれるので、生薬から要らない成分を除去し、有効成分だけを抽出しなければいけない。そして、有効成分の抽出度によって、薬物の効き目も大きく左右される。至難の作業と言っても過言ではない。

現在、業界を先駆けている日本の企業は、漢方薬の品質を維持するために、様々な工夫を凝らしている。最先端の技術を誇る生産設備の下、厳格な基準にもとづき原料生薬の厳選から製品化まで行い、品質管理も徹底していて、安全性と質の高さで各国の消費者の心

を鷲掴みにしているのだ。とはいえ、世界市場の 80%という巨大なシェアは、一朝一夕で簡単に築けるものではなかったはずだ。「日本の漢方薬の発展を支えてきたものは一体何だろう」と真剣に考えてみた。そして、様々な資料を調べた結果、次のようなことが分かった。

江戸時代は、鎖国政策により日本と中国の交流が途絶えた。その時点では、日本に伝わっていた中国の薬学の書籍は少なかった。中国から伝わってきた医薬の知識は少なくても、日本人はその僅かな知識をもとに、当時唯一の交易国であったオランダから「蘭方」の長所を取り入れ、独自の漢方を発展させたのだ。一つ例を挙げると、約二百年前に、あるお医者さんが蘭学で学んだ知識を漢方に取り入れ、龍角散という新しい薬を完成させた。その龍角散は今でも、訪日中国人から「神薬」と崇められるくらい人気を集めている。日本人は国外の文化を、自分達に合うようにアレンジしたり改良したりする能力に優れている。古来より日本人の中に秘められている「異文化への柔軟性」と「完璧さを追求する匠の精神」が、日本独自の漢方薬を発展させる上でも強く発揮されたのである。「なるほど」と悔しく思いながらも、ようやく納得できた。

一方、中国において千年の歴史を誇る中医薬の現状は決して好ましいとは言えないということもわかった。中国の製薬会社は投資の不足や管理体制の不備のほか、設備と技術面の立ち遅れ、農薬や重金属による汚染など様々な問題に直面しているのだ。そういった現状は、中医薬の研究や開発の道に立ちはだかる大きな壁となっている。

研究や開発の成果は生産に還元されるまで何十年もかかるかもしれないが、目先の売り上げや利益だけを追うという短絡的な考え方を変えて、腰を据えてじっくりと研究に取り組むべきだ。中医薬の本来の姿を取り戻すために、中国は落ち着いた研究を堅持するべきであり、同時に、思考の柔軟性や品質に対する強いこだわりなど、日本の漢方薬に学ばなければならない部分もたくさんあると思う。

独学で勉強した「日本語」と専攻している「中薬学」のお陰で、中医薬と漢方薬の違う点を発見しただけではなく、日本という国の素晴らしさをこれまでとは異なる視点で垣間見ることもできた。日中交流が活発になるにつれ、中国の学者や業者が日本を訪れる機会もどんどん増えてきた。中国の政府も日本の漢方を追いかけようと、様々な努力を講じている。私はこれからも一生懸命に専門知識を学び、研究経験を積み重ね、中医薬のさらなる発展のために自分の力を尽くしたいと思う。

★二等賞

「私と日本」

鄒　欣　（深圳職業技術学院応用外国語学院）

日本の印象といえば，富士山や満開の桜、そしてセーラー服姿の小柄な可愛い少女などを頭に思い浮かべる人は少なくないが、私にとって、日本の印象はただそんな単純なも　のだけではなく、もっと複雑で奥深いものがあるようだ。

私は日本に憧れている平凡な大学生で、もう二年間日本語を勉強した。二年前に「日本語を専攻にしっかり頑張ったらどうか」と勧めてくれたのは仕事の関係で少し日本語を勉強したことのある父だ。その時はただ英語以外の言葉を勉強するのは新鮮だと思っただけだったが、気づいたら今ではすっかり虜になってしまった。

中学生の時に、クラスに日本のアニメが大好きな子が何人もいた。毎日お昼の休憩時間に先生の許可なしに勝手に教室に置いてあった授業用のコンピューターを利用してこっそりとアニメを見ていた。目を光らせてアニメを見ていた彼らの熱狂ぶりは今でも記憶に残っている。でもあの時日本に否定的な態度を持っていた私から見ると、それは非常におかしいことだった。「受験を間近に控えてるのに、ちゃんと勉強もしないあんたたちは馬鹿じゃないの」と心の中でアニメ狂いのクラスメートたちを見下げたことが何度もあった。今思えば、アニメを全然見たことがないのに、偉そうに上から目線で人のことを評価する愚かな自分のことを思うと恥ずかしくてたまらない。

それは、2016 年のある平日の午後のことだった。私は今の同級生と一緒に日本のアニメを見た。『君の名は。』という魂の入れ替わった二人の少年少女をめぐって展開する感動的で美しいラブストーリーだった。私は生まれて初めて見たその日本のアニメの想像以上のすばらしさに深く引きつけられてしまい、主題歌を毎日繰り返して聞くほどだった。

その大ヒットしたアニメ映画のおかげで、私は初めて日本語がどれだけ優しくて美しい言葉だろうと感心させられ、昔から心の中で固まっていた「日本も日本語も乱暴でたまらない」という壁が少しずつ取り壊されていき、日本語を聞くと胸が得も言われぬ暖かさに包まれるようになった。悲しい日も心の中で「川辺に満開の桜が艶やかに咲き誇っている」絵を思い描いてみると、まるで肌寒い冬の日に暖かくて優しい春風に撫でられたように、誰にも慰められなくても、曇った心が自ずと晴れてくる。それは日本への憧れというもので自然と生まれてきた不思議な心を癒すマジックだと思う。そう、絶対にマジックだ。

でも、その憧れをなかなか理解できない人もいた。例えば、私はよく身近な人に「お前は何で日本語を勉強しなきゃいけないんだ？昔日本人は我々の土地をあんなに酷く踏み躙ったくせに」というようなことを言われた。その度に私は「……ははは、好きなことには理由がいらないじゃない？」と笑ってごまかしていた。しかし実は、私も自分自身に同じ質問をしたことがある。そして、「三毛」という台湾出身の有名な女流作家を知るまで、私は随分迷っていてなかなか自分の質問に完璧な答えを出せなかった。

『サハラ砂漠の物語』という三毛氏の著作に、「ある日、私は偶然サハラ砂漠の絵を見かけた。すると、まるで前世の郷愁を感じたように、何も言わずに心の中でサハラ砂漠に行こうと決心した。」という文があった。その文を読んだ後、私は思わず手で口を押さえて「そうだ！」と喜んで叫んだ。うまく説明できないけれど、時々夢にも出てくるほど恋している日本への思いは、まさに私にとって「前世の郷愁」だと言えないだろうか。

そして、その幻想の故郷日本と現実の故郷中国をより深く繋ぐため、まだ成人していない私にできることといえば、まずは日本語を学習し、日本を理解することだ。私は中国人の若者として、いつまでも過去の歴史に拘るわけにはいかない。もっと冴えた目で、そして前向きに両国の姿を見ないといけないと思う。まだ私は微力しか持っていないが、努力すればきっとより良い日中関係を作ることに貢献できると思っている。

「平和と友好　中日関係の原点と未来 忘れてはならないこと」

呉元欽　（東華大学外国語学院）

「母さん、この写真はいつ撮ったの？」

「ああ、これは二十年前に父さんと恋愛していた時よ。」

「じゃあ、これは？」

「へー、この写真まだあったの？どこから見つけてきたの？この写真の人は二十年前に日本から中国に来た国永さんよ。」

「え、父さんと母さんに日本人の知り合いがいたなんて…。」

二年前の夏、私が今の大学の日本語学科に合格した後、母とともに以前の写真を見てい

ました。すると、私が全く面識のない年配の人が両親とともに写っている写真がふと目に留まりました。驚いたことに、外国語ができない両親が二十年前にこの日本人と仲が良かったというのです。国永さんの中国での経歴を聞き、以前の日本人に対する消極的な印象と感情が大きく変化しました。

国永さんはある有名な化学工業会社の会長でした。私の故郷である、山東省淄博市の最大の化学工業会社の塩素工場を建設する際、国永さんを代表とする日本の専門家達が現地を訪れ、協力してくれたそうです。当時、父は塩素工場の従業員で、母は中日双方の通訳さんの助手をしていました。母は毎朝、日本の専門家達とともに朝礼に参加しており、そこで国永さんと徐々に親しくなったそうです。

「母さん、国永さんはどんな人だったの？」

「そうね。国永さんは非常に仕事に真面目で、責任感のある人だったわよ。塩素工場の作業場のうちの一つが試運転していた時、爆発しちゃったことがあってね、大きな音がして現場にいた中国の従業員達は慌てて工場の外に逃げたんだけど、日本の専門家達は危険を顧みず、足早に現場に走っていったの。会長さんもすぐに施設の補修工事を始めたから、すごくびっくりしたわ。そんな責任感のある人を見たことがなかったし、日本経済が発展した理由が少し分かったわ。」

「へー、すごいね。もし僕が現場にいたら、一目散に自分の家に逃げただろうな。」

「そうそう、お前のおじいちゃんは中国の内戦と朝鮮戦争に参加したから、外国人に対して印象があまりよくなかったけど、この事故が起きたことで、日本の専門家達のことを心から尊敬するようになったのよ。」

「そうか。」

「でも、私が一番感動したのはこのことじゃなくて、国永さんが定年退職した後に、また中国に来てくれたことなの。中国側からも日本側からも給料は出なくて、二年間自分のお金で父さんの工場の設備を補修してくれていたの。彼の恩情は絶対に忘れられないわ。国永さんに会うたびに、必ず深くお辞儀をしてくれたの。地位がそんなに高い、六十歳を超えた人が若者をこんな風に尊重してくれるなんて、恥ずかしかったけどすごく感動しちゃったよ。」

国永さんのことを聞いて、日本人への感情が一変しました。中国と日本の民間交流は数千年間続いています。しかし、二十世紀以来、中日関係の起伏は激しく、大多数の中国人にとって「日本」「日本人」という言葉は単なる名詞ではありません。日本というと、マイナスの感情を持っている中国人が大勢います。実は、日本人が中国に見返りを求めず助け

てくれた逸話は数え切れませんが、多くの中国人はそのような事実を知りません。私はこのような美しいエピソードを多くの中国人に知ってほしいと思います。歴史を正しく見れば、中日関係の美しい未来が実現できます。

「あ、そうだ。長らく国永さんと連絡を取っていないから、今度のクリスマスには是非国永さんにハガキを出すわ。」母が懐かしそうに言いました。

「うん、じゃ、僕が翻訳を手伝うよ。」私は微笑みながら言いました。

★三等賞

「今、平和を考える」

馬智民　（中央財経大学外語学院）

最近、中国と日本では不幸なことが起きていました。9 月 6 日、日本の北海道では、胆振地方中東部地震で数十人が犠牲になり、数百人がけがをし、他の被害者は数を数えられないほど出ました。同じく 9 月には、「山竹」という台風が中国の広東省に登陸し、中国南部の沿海に巨大な災害となっています。

中日両国は災難が頻発する国だが、災害のたびに、両国の人々はすぐに積極的に救助を行い、被災地の人々の生命と財産の安全を保障しています。このような人権に対する十分な尊重や困難に直面した時一致させ、助け合う精神は、両国が次々に危険を乗り越えられた重要な原因の一つであると思います。

1978 年から四十年間、両国は無数の風雨を乗り越えました。1972 年、田中角栄首相の中国訪問が氷を破り、1978 年鄧小平の日本を訪問しました。1973 年、天津と神戸は初めての友好都市を皮切りに、今では 300 組ぐらいの友好都市が盛んに発展しました。この四十年は、相互援助の四十年であります。2018 年は日中平和友好条約締結の四十年です。

これをきっかけに中日両国の平和問題が私の思考を引き出しました。

我々の先輩たちは、40 年前に平和友好条約を締結する方式で中日両国間の対立と敵視を終わらせました。重要な歴史の時期には、議論を棚上げにし、裁判部ではなく、交渉のテーブルで対等に話し合いを交わし、中日国交の新しい一章を開いました。それは本当に素晴らしいだと思います。それ以来、中日両国は政治、経済貿易、文化、観光、技術などの多様な分野で広い交流と協力を展開してきました。

近年、中国に来た日本人観光客が増えています。5 月のある日、学校に帰ってきた 13 号地下鉄で、一人で北京を旅行した日本人の青年に会いました。当時の状況はこうでした。「日本語が分かる方、いらっしゃいますか?」という駅係員の声を聞きました。こちらの日本青年は、中国語も英語もわかりませんでした。でも、彼が持っていたのは、日本語で観光パンフレットだったので、日本人観光客だったと判断しました。彼はパンフレットの中で一枚の写真を指しました。私は彼より少し背が高いので、思わず膝を曲げて、彼の維持と同じ高度に見て、それは万里の長城でした。そして、私は日本語で万里の長城への行き方を教えました。日本人に対する抵抗感があると思っていますが、周りの人の目から私への称賛を感じました。その後私は駅に着いてから車を降り、その後彼が無事に万里の長城に行けたかどうかも知りませんでした。その経験を通して、私は初めて日本語を勉強することが役に立つことを意識して、人を助けることができてとてもうれしいと思っています。とともに、私も、あの日本人の青年にたいへん感心しています。一人で、異国に来て言語さえ分からなくて、勇気を持って乗り越えることが必要です。しかし、考えてみれば、それも今の中日両国の平和友好関係の縮図だと思います。異国の地でもいい、言葉が通じなくてもいい、中国のどんなところに、多くの人がこの日本人の青年を助けると信じています。

私は平和が簡単なことだと初めてわかりました。「平」を先に「和」ということができます。「平」というのは「平等」のことであり、「和」というのは「平和」のことであります。以前、中国人はいつも被害者の視点で中日関係を見ていました。确かに歴史は、日本がかつて中国を侵略したことを教えて、中国人民に深刻な災難をもたらしました。しかし、これは無意識のうちに自分を見上げる視点を置きました。これは憎しみの見方です。このような視点で、中日は平等ではなく、平和も言えません。中国は世界第 2 の経済体となり、発展はますます良くなっています。中国人が自信を持って、これは我々の誇りに値することです。しかし、これは自分を見下ろす視点を置きました。これは自慢の見方です。「平和」はこの視点で、強力な方に転落した独りよがりの施し、結果はただ意味のないスローガンになりました。中国と日本とは平等の国で、中国人と日本人とは平等の人間です。私たちは相手に平等の視点を選択するとき、相手の目の中で憎しみも自慢も見えなくて、同じ平等の視点を選択する相手だけを見られます。平等の視点を選択するのは、平和な気持ちで現実を直視しますと同じ意味です。まず「平等」を作り、「平和」は自然なことになります。これが「平和」という言葉が私たちに伝えたいものですね。

「平」から「和」に行く道を選択は、我々の世代の選択しなければなりません。

私の希望は中日平和です。「平和」を実現するために、みんなで平等の方法を採用し、力を合わせてほしいです。

「平和と友好　中日関係の原点と未来」

郭　盼　（東北財経大学国際商務外語学院）

「秋の田の…」バチーーーーーンッ

このシーンは日本のアニメ「ちはやふる」で見ました。初めて見る時、自分が現場にいて、試合をしているようにドキドキしました。しかし、読み手が読んでいる短い歌は、初め何かわかりませんでした。見終わってから、かるたに興味を持ちました。いろんな資料を調べ、かるたは藤原定家が 1235 年に選んだとされる「小倉百人一首」で、歌集ということを知りました。そして日本の和歌とはいえ、中国と関係あるところが多いということに気づきました。

「君がため　春の野に出でて　若菜つむ　わが衣手に　雪は降りつつ」

光孝天皇が描いたこの雪の中で芽を摘む場面は古代日本の一つの習慣に関わっています。毎年の正月七日に「春の七草」を摘んで「七草粥」を煮て天皇に献上します。これで病気を追い払うことができると言われました。しかし、実はこの風俗は中国から伝えられました。『荊楚歳時記』という本に「正月七日为人日，以七种菜为羹」と書いてあります。遣唐使の山上憶良はその本を日本に持ち帰りました。

中国と日本は地縁関係のために、ずいぶん昔から文化交流が始まりました。千年経っても、このような例はたくさんあります。両国は近隣で、歴史的な絆があることを否定する人は間違いなくいません。友達を作ることに例えると、お互いを理解すれば、絆が生まれる第一歩だと思います。しかも、民俗習慣は国を超えて、異なる文化を跨ぎ、海を飛び越え他国で広く伝わったのは、とても不思議なことです。これは両国の関係がよくなるきっかけでもあります。

「天の原　ふりさけ見れば　春日なる　三笠の山に　出でし月かも」

「望郷の詩人」と呼ばれた阿倍仲麻呂が書いたこの有名な和歌は彼の故郷を偲ぶ思いを私たちに伝えています。阿部仲麻呂がとくに親しく交流をしていたのは、日本でも有名な

李白や王維などの唐詩人です。養老元年(霊亀 3 年)に唐に来た阿倍仲麻呂は 35 年ぶりに帰国することになりました。しかし阿倍仲麻呂が便乗した船が遭難し、安南に漂着。ついに仲麻呂は帰国することはできませんでした。そのとき、長安には仲麻呂が死亡した。との誤報が流れます。李白は非常に嘆き悲しみました。

この物語を知ると、私は彼らの温かい友情に感動せずにはいられませんでした。異国から来た阿倍仲麻呂は中国でこんなに親しい友人ができたことは珍しいことだと言えます。その理由と言えば、長年にわたっての交流は不可欠なものだと思います。友達になるために、まず時間をかけて、相手のことをちゃんと理解しようとする姿勢は重要です。中日関係も同じです。両国とも積極的な態度をとって、阿倍仲麻呂のような使者がどんどん増えれば、中日関係はより発展していくと思います。

「鵲の　渡せる橋に　おく霜の　白きを見れば　夜ぞふけにける」

大伴家持は冬の更けた夜に星空を仰ぎ見ると、天の川の鵲が渡したと言われる橋のあたりは、霜が降りたように白いと歌っています。この物語は、旧暦 7 月 7 日に、織女星（織姫）と牽牛星（彦星）が、天の川を挟んで最も光り輝いて見えることから、この日を年に一度の巡り会いの日と考え、中国で生まれ、奈良時代に日本に伝わってきたものです。

祈り方に大きいな違いがあるが、両国とも同じ織姫と彦星が無事に会えることを祈り、二人の間の愛情を謳歌しているのではないかと私は思っています。彼らは毎年、鵲の橋で会うことで二人の愛情を育みます。会えない時は、一年中二人ともきっと相手を思い、その日が来るのを楽しみにしています。誰もがこのような涙が出るほど美しい愛情に憧れます。もし中日関係が彦星と

織姫のような関係になるなら、両国の矛盾や争いは大幅に減るだろうと思います。

この三つの和歌を通じて、私は中国と日本が昔からの絆で生まれた友情と愛情のような文化的なつながりは、中日関係の原点だと思います。中国と日本は歴史上の関係はとても深いと言えます。したがって、その関係を強化することに力を入れるのは最も望ましいと思います。そのために、古代の時のように、開放的な姿勢をとることが必要です。まず両国の絆を見つけ、学び合い、互いの長所を取り入れ、自分の短所を補い、だんだん友達になっていきます。違うところが必ずありますが、小異を残して大同につくということは最も重要だと思います。ところで、古代から結ばれている運命のような線は中国と日本を緊密につなげています。日本は中国に対する文化研究はすでに千年以上になっています。けれども、中国はそんなに日本をよく知りません。ですから、私は日本語を専攻している学生として、両国の文化交流を促進する責任を果たすべきだと思います。「小倉百人一首」と出会ってから、私はさらに日本文化に興味が出ました。今後は日本文化を研究する仕事をしたいと思います。未来の中日関係を促すために自分の力を捧げたいです。

★優秀賞

「平凡な生活の中で輝いている、彼らの人生」

何佳宜　（南京郵電大学外国語学院）

わたしは子どものころから、クラスメートと同じように、アニメや映画などが大好きで、ずっと日本のことに興味を持っている。しかし実は、日本との関係は高校時代になってからだ。

ある日、先生から課題が出た。毎週、自分の興味がある社会に関する番組をみて、感想文を書くことだ。自分が興味を持っていれば、どの国の番組でも構わなかった。あのころのわたしにとって、それは極めて困難な課題であった。感想を述べるのが苦手だったわたしには、「ドキュメント 72 時間」という番組と出会ったおかげで、随分助かった。

ある午後、まだ適当な番組が見つけられなかったわたしは、偶然中国の「ビリビリ」というウェブサイトで「子どもたちの小さな宇宙」という字が目に入った。強烈な好奇心に駆られて、クリックして見てみた。どうしてこんな小さな店は子どもたちの宇宙になれるのか、この疑問を持って最後まで見ることにした。

港町の神戸で、もう 50 年以上営業を続ける駄菓子屋がある。その店は日本全国であまり見なくなった昔ながらの店構えである。その店の店主はもう三代目になっていて、現在の女将さんは由紀さんだ。子どもたちは彼女に親しみを込めて「ねーちゃん」と呼ぶ。近くの学校に通っている小学生、中学生、高校生、たまには社会人も訪れる。毎日授業が終わったあと、いつもねーちゃんの店に来てクレープを買う男の子、店でお菓子を買って、そしてお母さんの仕事のところへ戻って、お菓子を食べながら静かにお母さんを待つ小学二年生の女の子、店で友達とゲームをする子。そのような日々が続いている。たまになやんでいる子が来れば、ねーちゃんは熱心に彼らの話を聞いて、励ましたり、慰めたりする。子どもにとって本当に姉のような存在である。夜になると、子どもたちは次々と家に帰るが、店はまだ閉店しない。子ども連れの若い片親のお母さんは、夜の仕事の前に、いつも店に来る。時には笑ったり、昔の悲しかったことを話したりして、リラックスしながら、その時間を楽しんでいるように見える。駄菓子屋は不思議な人間の交差点である。幸せな記憶が残るその場所に、いつか皆が帰ってくる。

松崎ナオさんの『川べりの家』という曲が聞こえたとき、どういうわけか、熱い涙がもう目に溢れていた。「これだ。やっと見つけた。」という気持ちが胸に込み上げた。その後、

「ドキュメント 72 時間」の魅力に深く惹かれていた。わたしも何の感想も書けなかった人から、だんだん文才の良い人に変わっていた。一番印象的だったのは「秋田・真冬の自販機の前で」であった。便利なコンビニや 24 時間営業の飲食店もある時代に、そのうどんやそばを売る自動販売機は多くの人の心を温めた。ガンと戦っていた洋菓子職人、給料日前の夕食をする仲間、出勤前の腹ごしらえをするトラック運転手、平凡な生活のうらには、人々が力を尽くして生きている。

毎回この番組を見ているうちに、人生の喜びや悲しみをよく理解できるようになっていった。この番組がわたしにくれたのは、無限の宝物だ。飾り気のないナレーション、平凡な撮影技術、スターがいない、脚本がない、ただそこで生活する人間がいるだけだ。そんな平凡な番組だけど、いつもわたしの心を打つ。生活に対する態度もその影響を受けて変えてきた。たった 72 時間の間にいろんなことが起こる。一方で、変わらないのは人生の意味だ。中国でテーマ同じような番組もあるが、それを見ても、何を伝えたいのかがよくわからない。わたしは我が国のドキュメント製作技術の向上には、まだ長い時間が必要だと思っている。「ドキュメント 72 時間」は私と日本の架け橋になって、日本のことを深く知るきっかけになった。

「わたしもいつかあんな素晴らしい番組を作りたい。」という気持ちを持って、決してあきらめずに将来の夢を追いかけるつもりだ。希望があれば、夢はきっといつか叶う。それも、「ドキュメント 72 時間」がわたしに教えてくれた大切なものだ。

「私と日本」

陳姝諭　（嶺南師範学院外国語学院）

今年の９月から私は４年生になります。みんなには内緒してるけど、実は私、一年生のとき、日本語が大嫌いでした。自分がなぜ日本語を専門として選んだのがさっぱり覚えていないが、一年生の時毎日単語と文法を嫌々で暗記したことは記憶に鮮明です。

こんな私ですが、二年生に入る直前に、嵐というアイドルグループに出会いました。ある日、ユーチューブで偶然嵐がゲストとして呼ばれたバライエティ番組を見かけました。見てみたら、嵐の五人が一人一人個性があって発言もすごく面白かったです。てっきり笑い芸人だと思った私は、日本で大人気なアイドルグループだという調べた結果に驚きを覚えました。彼らに興味が湧き、彼らがＭＣを担当した番組や出演した歌番

組などをいろいろ探して観て、気づいたらもうすっかりファンになりました。

中国語でアイドルを好きになって追いかけることを“追星”と言います。“追星”という言葉は盲目的に崇拝するというマイナスなイメージがあるので、、私が嵐のファンになったことが母にバレてたら、予想は全く裏切られず、母は怒り出し、やめなさいと私を何度も何度も“注意”した。

しかし、嵐にハマってから私に大きな変化が起きました。探し出した嵐の番組動画はほとんど中国語の字幕が付いていなかったので、彼らが何を言っているのがさっぱり聞き取れなくてただただ表情と動きを見てうふふふと笑いました。それはさすがにいけないと自分が気づき、彼らの言葉を聞き取れるように日本語の勉強に一生懸命励みました。いつか聞き取れるようになれると信じて以前嫌な単語と文法の暗記も愛しく見えてきました。それからは毎日日本語勉強三昧だったけど、嵐に興味と愛情を持ちおかげで、嫌な気持ちもなくなって、いい思い出になりました。それを通して日本語が気づかぬうち少しずづ上達になりました。なんと！大学二年の下半期が終わる前に、事前字幕が付いているバラエティ番組だけじゃなく、ラジオも聞き取れるようになりました。自分で言うのはなんですけど、それがゆえに日本語能力検定試験N2とN1も楽々と合格しました。嵐愛の結果がこれだけだと思っていらっしゃるでしょう？ブブー！残念！不正解です！これだけじゃありませんよ。様々な日本ドラマや雑誌、小説などにも興味を持つようになりました。日本のことにも詳しくなり、家で家族と食事したとき、日本のことをいろいろと母に伝えたり一緒に日本の番組動画を見たりしました。バラエティ番組に出できた「マジ卍」、「３５億」などのネタも母に教え、共に笑いました。母も私に起きた一連の変化に気づき、段々と納得ようになり、三年生に入ったばかりのある日に「あんた、嵐好きになってもいいよ」と認めてくれました。ただのファンということが認められたのは分かっているが、私は嵐の嫁さんとして認められたかのような嬉しい気持ちでいっぱいでした。

留学のチャンスに恵まれて、４月に日本に来た私がラーメン屋にアルバイトの面接に行ったとき「チンちゃんはうちの初めて雇った中国人留学生バイトさんだよ」と店長に伝えられ、上手くできるかどうかと最初はすごく心配しました。でもそこでバイトしてみたら、店長や一緒に働いてる先輩たちもすごく優しく接してくださって、中国のこともいろいろ聞いてきてくださいました。バイトの初日で先輩から中国人は「冷やし中華」が好きですかと聞かれ、中国人は冷たいものより温かい料理が好きだと先輩に伝えたら、「じゃ冷やし中華という名前はだれが名付けたのだろう」と先輩は首をかしげました。「なんで冷やし中華って呼ばなければならないの。冷やし麺や冷麺だっていいんじゃない。」と私はツッコミを入れみんなの笑いを誘いました。同い年のバイト仲間と嵐のことをいろいろと話し合って初日だという緊張も穏やかな雰囲気で徐々にほぐれました。笑顔で接客したらお客様も笑顔を返してくださいました。お客様が会計を終え店を出ようとした瞬間に振り向いて「謝謝」と中国語で「ありがとう」と言ってくださることも時々あります。日本人の優しさと暖かさを身を持って実感しました。

私は日本に来た理由は嵐を追いかけるのだけじゃなく嵐が好きになって必死に勉強してきた日本語を活かして中国のことや中国と日本に比べて同じものや相違点などを日本人の友達に伝え、中日国際交流に身を尽くすことです。中日友好な架け橋になりたいと思います。いや、なりたいだけじゃなく、なります。なれると強く信じてます。

「異母姉妹」

李玲妤　（斉斉哈爾大学外国語学院）

一年前に、私は温州から斉々哈爾に大学に来た。小さい頃からずっと雪が見たかったから、大学志望は東北の大学にした。初めて来たとき、北方の気候は南方とすっかり違うことに驚きを感じたが、ここの立派な木を見たり、すごい吹雪を経験したりしたら、感激でいっぱいになった。

先日、日本人の先生は斉々哈爾を紹介するビデオを企画した。私はそれに参加して、扎龍と嫩江の案内の役を担当することになった。

扎龍は丹頂鶴で有名な中国第一の自然保護区である。さまざまな天然の湖沼は扎龍に嵌め込まれたクリスタルガラスのようだ。鶴が舞い上がるとき、天地の果てしない広さを感じて、都市の喧騒を忘れて、心も伸び伸びする。

しかし、嫩江については何も知らなかった。何を紹介すればいいのか困っているとき、先生に「与謝野晶子が嫩江のほとりの留園に来たことを話してはどうか」と言われた。そして、先生に彼女の歌を見せてもらった。

「窓に倚り梨の花をば見上げたる夫人の顔も白き夕暮」、「我身をば中華の貴女の逍遥の車に見出づ夕日のもと」...。これらの歌を読んだ時、「わあ、美しい」と思った。私はまだ日本語初心者なので、この歌の完全な意味はよく分からないが、美しいと感じた。本当に不思議な感覚だ。何故だろうか。意味がよく理解できないのに、柔らかい月光が窓の外から梨の花びらを照らす画面があらわれた。華服を着た女たちがくつろぐゆったりした気持ちが目の前にあるように感じられる。特に感取されたのは、歌人が詠んだこの綺麗で人を酔わせる景色の好ましさだ。

また、先月、電子辞書を買ったばかりの時、私は辞書の中の小説の名前「幽霊」に引かれた。この小説の名前がおもしろくて、ためらわずに読み始めた。でも、初心者にとって

内容は難しくて、全部理解できたと言えない。読んでいる最中、自分はいったい何を読んでいるのだろうとも思ったけれども、案外に、読み進めば進むほど著者が醸し出した怖い味わいにひたっていく自分がいた。

一方で、西洋の作品は、内容が全部分かり、ストーリーの背景も分かっても、最後まで作者が本当に伝えたいことが分からないことがよくある。有名な詩人の詩句、たとえば「Had I not seen the sun, I could have borne the shade. But light a newer Wilderness」もそうだ。たとえこの詩の意味がよく分かっても、詩人が何か伝えたいのか、彼女の気持ちがどうなのかは、しかとは感じられない。感情に共感しにくい。

それに対して、日本の作品の場合、背景や意味などぜんぜん理解できなくても、作者が作り出した雰囲気も伝えたい感情も感じられる。それは、中日文化に共通性があることがその理由ではないだろうか。共通性があるから、感情にも共感しやすくなる。

その共通性は、まず、日本と中国が同じ流れを受け継いでいることに由来する。唐時代に日本は、漢字、飲食文化、風俗などを学びながら、自分の文化を作り上げた。日本は中国の伝統文化と一脈相通じていながら、また全く違う姿を見せる。中国と日本の文化は同源異流だということができると思う。同源であるので互いに絆がある。でも、双方はときどきこの絆を見失うことがあった。

中国と日本は同父異母の姉妹とよく似ていると思う。彼女たちは同じ父から生まれて、容姿や性格などがぜんぜん違うにせよ、血の本源が同じだ。そのためにかえて反発しあいこともあるかもしれない。でも、たとえどんなに痛切な争いが起こっても、最後はきっとなかなかおりできる。姉妹だから、同じ血の絆がある。これは両人ともよくわかっていることで、それが互いに離れがたい理由となる。それが中日関係の原点だと思う。

中日関係の原点に戻れば、本来は明るくて、輝かしいに相違ない。それに、平和ということは両国人民にとって望ましいことだ。今も中日の間にちょっとした矛盾があるにしても、将来は互いに真の親しみを感じあえると信じている。姉妹だから。

斉々哈爾の嫩江に遊んだ与謝野晶子はこの詩を書いたことでも有名だ。「ああ、おとうとよ、君を泣く、君死にたまうことなかれ、未に生れし君なれば、親のなさけはまさりしも、親は刃をにぎらせて、人を殺せとおしえしや、人を殺して死ねよとて、二十四までをそだてしや」。戦争に兵士として取られた弟を詠んだ反戦詩である。中国でも日本でも、人々は平和を望んでいる。静かな嫩江の流れのほとりで、それを感じる。

「平和と友好、中日関係の原点と未来」

田梅傑　（中日国際フェリー株式会社）

中国でもっとも知られている僧侶は二人いる。一人は唐初期、インドに渡り、仏教教典を持ち帰った玄奘で、もう一人は約 1300 年前、海を渡って、戒律制度を日本に伝えた鑑真和上だ。二人とも仏教文化の発展に大きく寄与しただけではなく、中印、中日の平和交流の先駆けとしても挙げられる。私は大学卒業後、船会社に就職し、「新鑑真」という中日国際フェリーで乗組員をしている。なぜ船名は「鑑真」なのか、それは最初に抱いた疑問だった。　船のロビーに飾ってある掛け軸に衣を着、数珠を手に持った盲目の法師一人が描かれ、横に鑑真の生い立ちも書いてある。唐の時代、鑑真が日本の留学僧栄叡の招きを受けて日本東渡を決意した。その後の 12 年間、5 回も失敗を繰り返したのだった。そのうえ国禁まで犯し、愛弟子栄叡を失い、さらに両目も失明した。6 度目の渡航の西暦紀元７５３年にようやく日本にたどり着き、日本で余生を尽くして円寂した。汽船のない時代、海を渡ることは如何に困難だったか、私には想像もつかない。荒い東海、危ない暗礁、悪い天候、思いがけない病気…そんな艱難辛苦に屈せずに思いを遂げた精神力の強さに心を揺さぶられた。普通の人なら、早々に諦めてしまうだろう。もちろん「果たして日本に渡ることは間違いなのか、果たして仏の意は西に向かうことで、東の日本へ向かうことではないのか」と彷徨う時期は鑑真にもあったと思う。ただ、「長明燈は常在不滅」という言葉を鑑真は信じていた。目が暗くなっても心に信念の光が消えることはない。それは日本の栄叡から託された願いか、それとも仏教こそ人々を救えるという発想か、いずれにしても鑑真は自らの命など一度も顧みなかった。無私の大義だ。現代人はその「義」を無くしつつあると私はそう思わずにはいられない。自己中心的、利益を最優先するという考え方がある限り、人々は絶えず競争の渦に巻き込まれていて安息の日もやって来ないし、中日関係も改善できないだろう。

日本の奈良で鑑真は東大寺大仏殿に戒壇を築き、日本仏教に戒律制度を定着させ、唐招提寺の建立にも力を尽くした。仏教以外にも薬草、印刷、書道、彫刻など唐の最新文化、技術を日本にもたらした。文明の進歩に対する平和交流の重要性はこの歴史的出来事からでも見出せるだろう。今や国際交流は未曾有の規模と速度で進み、さらに他国の長所を見つけ相互に学び合うことは最も大切ではないか。中国と日本は「一衣帯水」の隣国同士、長い交流の途中、友好的な往来もあれば、戦争による苦痛な思いもして来た。日本は近代において中国を侵略したことは事実だ、正義感と理性のある日本人なら、誰もが認めるだろう。しかし、昔のような弱肉強食の対外政策はもはや現在や将来に通用しないと思う。共通認識の得られない問題、例えば歴史に対して両国の食い違いはなるべく激化しないように保留し、もっと大同を求め、大局に重点を置くべきだ。世界経済が益々一体化していく中、平和は両国に利益をもたらし、争いは損失をもたらすということはすでに人類共通の認識となっている。中日交流の一番盛んだった唐時代に目をやると、鑑真和上の功績は

最も輝く存在だ。今中日が直面している難題を解く鍵は鑑真精神にあるのではないか。

「新鑑真」フェリーでの仕事は常に鑑真のことを思い起こせる。船のブリッジの仏壇で鑑真の坐像が置かれている。年明けになると、船長から線香をあげて新しい1年の交通安全を祈り、日本に着けば唐招提寺に詣でるという慣例もできている。毎年、日中友好という志のある日本の学生の団体が研修で乗船する。名は「鑑真プロジェクト」だ。鑑真和上は中日共通の熟知され敬愛されている人物だと実感するのだ。そこで、政治的なスローガンよりは、中日両国国民の共有している文化的なものを生かしてソフトパワーで中日関係の改善に繋げるのは如何なものか。特に中日の若者同士に生身で付き合う機会を作れば、そこから友情も生まれる。そして、彼らが実際に見聞したことをその周囲に伝えていくならば相互理解の輪も広げていくに違いない。身近な例を挙げると、船の常連でもある張宇さんは「奔流中国」という旅行企画を立て、日本の若者を対象に中国の内モンゴルの大草原で実際の遊牧民族の生活を体験させ、知られていない中国野生の一面を感じさせる。私の故郷洛陽の外国語高等学校は毎年船を利用して何十名もの中国留学生を岡山外国語学院に送っている。洛陽と岡山市は友好都市だそうだ。

中日友好の根底には鑑真の不屈の精神、博愛と平和の思想が宿っている。これは中日関係の原点だが、その思いは1300年後の未来――現代へも届いている。私は自分の仕事を通じて鑑真精神を引き継ぎ、中日友好に努力して参りたい。

「私と日本」

高夢雨　（首都師範大学外国語学院）

私と日本の縁は、様々な道を歩むことで結んできたものだ。それは二度と巡り合うことのできない風景が満ちている道であり、私の成長の道でもある。

「出る月を待つべし、散る花を追うことなかれ」と中根東里は嘗てそう言った。「済んだことは終わらせて、新たな出来事に向かい合おう」と教えてくれたのだが、世間を渡ることもまた同じだろう。歩んできた道を、間違っていても遠回りだったとしても、既に過去の事にすればいい。これからすべきことは、唯々勇気をもって突き進むことだけだ。

このような気持ちで、三年前に私は日本語を学ぶ道に入った。日本語や日本文化を学ぶ

道に踏み込んで以来、毎日「日本」に向き合って過ごしてきた。日本への先入観を持っている人々から、微妙な表情で見られることも少なくない。しかし、それに対して「私は間違った道を選んだのだろうか」というような疑いを持ったこともなく、ひたすらこの道を楽しんで歩んでいる。

日本語を勉強する中で、私は新しい道を見つけた。それは居合道だ。一人で行う武道修業と言ってもいい。刀を使って冷静に速やかに敵を切り倒すような様は一見怖そうに思われるが、実際に打ち勝ちたいのは「もう一人の自分」だ。つまり、居合道は悩んだり迷ったりしている、精神的に弱い自分との戦いだ。三年以上も居合の道を辿ることで、日本のことがたくさん分かるようになってきた。礼儀や言葉の勉強などはもちろん、最も面白く思うのは、日本人は本当に「道」という言葉が好きなことだ。芸術なら茶道、華道、書道、武術なら剣道、柔道、弓道。難しくて深そうだが、学ぶ人は大勢いる。その理由を考えれば、おそらくすべての「道」は、あくまでも「内なる自分と付き合う道」なのではないか。難しいのは、ある種の技術を学び尽くすことではなく、善悪問わずに内なる自分の存在を認めることだと思う。言わば自己認識、自己研鑽のようなものだろう。それはまさに勇気を求める道だ。一つの道を辿ることで自分自身を改善して向上させようとする日本人の賢明さには、感心を覚えずにはいられない。

居合道という道を見つけたことで、私はますます日本に近づいたような気がした。そして交換留学をきっかけに、私は実際に日本の「道」を歩くことができた。海外では何でも一人でやらなければならないので、きつくて寂しい道だと思っていた。ただ、考え直してみれば、朋も一緒だろう。混んでいる電車に乗って自分の目的地だけを目指している朋、疲れた体で家路を急ぐ朋、大学寮でパソコンと向き合う朋。朋だけに限らず、何らかの目的で自分の道をまい進する人が至って多いように感じられる。私の眼には、これは東京の日常だ。何かを目指して大人しく自分の道をまい進する姿が、やはり「日本人らしい」というように感じている。このような「一人の道」はきつくて寂しいからこそ、自分の精神を磨き上げていて、「一人前になる道」でもあると考えずにはいられない。

あちらこちらへと行くうちに私は、いつの間にか神社につながる道を知った。真夏日に石清水八幡宮の鎮座する男山へ登った時には、山が高いせいか、暑くて倒れそうになったこともある。周りに登山客もいなければ、山小屋もない。青々と茂った木陰に座った私は、自然の懐に抱かれて、却って普段にない落ち着きを取り戻した。時に吹き抜けるそよ風や鳥の囀りは、清冽な水のように私の乾いた不安な心に沁みてくる。辿りづらくても心を癒せる「自然の道」だ。一人で何時間も鈍行列車に乗っても、重いリュックサックを一日中背負っても、お腹が空いて食事処が見つからなくても、あまり疲れた感じがしない。それは、まさに「雨風も紅葉も月雪も何れも神の姿なりけり」というように、美しい景色も厳しい状況も、すべてが神さまから頂いたものだと思えば、疲れも日ごろの煩悩も飛んでいき、心が清くなることであろう。

中国では古くから「万巻の書を読み、万里の道を行く」と伝わっている。学問をする人にとって、大事なことは書籍を読むことだけでなく、色々な道を歩むことで様々な人生体験をしたり、人格を磨いたりすることも必要な修行だという。世にはまっすぐな道が少ない、まっすぐな心を持つことも難しい。しかし、「大変に逢うては歓喜踊躍して勇み進む」と山本常朝が述べたように、逆境を糧に変えさせすればこそ、人生の道が開くと私は信じている。

日本の様々な「道」が私に教えてくれたのは、人生の道でもある。

「私と日本」

張驚晨　（広東外語外貿大学）

日本のことを初めて知ったのは、いつ頃のことだろう。どれほど記憶を辿っても、よく覚えていない。また、初めて読んだ日本の文学作品もすっかり忘れた。だが、気が付いた時に、日本文学は私の人生の不可欠な一部になる。

村上春樹の小説『海辺のカフカ』は、『オイディプス王』に倣って書いたものかもしれないが、それを中心に理解すれば、ギリシアの悲劇と根本的に違う村上春樹のこの作品の魅力は読み取れないと思う。物語全篇を貫く二人の旅こそ、その小説の醍醐味であろう。旅にはいろいろな種類のものがある。遊びたいと思って楽しく出る旅もあれば、政治の失敗で荒涼たる所に流罪にされた旅もある。また、野心による植民地の拡張、真理への熱意による探険など、みんな旅であろう。だが、田村カフカと中田さんの旅は違う。それは寂しさを味わう旅である。まるで茫々たる海面に浮いている小舟のように漂い、漂っている。常なるものはあらず。その小舟は何処へ行くのだろう。何処かで沈むのだろう。何処かでほかの小舟に出会うのだろう。何処かで独りぼっちになってしまうのだろう。孤独は確かに辛いが、自分が愛する人、自分を愛する人さえ何時か消えて行くのも確実である。ネオンライト満ちた、にぎやかな大都会の内面に埋まっているのも、ほかなく孤独である。誰か私の代わりに生きてくれればいいと思っても、不可能なことであろう。自分の一生を送れる人は、自分しかいない。寂しさを伴に漂う旅は人生である。「日々旅にして旅を住みかとす」と漂泊の詩人の松尾芭蕉は感嘆した。

人生をどのように送ればいいのか。選択問題ではないから、自ら自分なりの答えを作り出すことができる。私は兼好法師の生き方が気に入る。静かな心境で、硯に向いて、いろ

いろと考えながら綴る。滑稽なこと、悲哀なこと、自分のこと、他人のこと、人間のこと、自然のことなどなど。誰かと会話するのもいいし、無言のままで向き合うのもいい。人間の感情をたっぷり味わい、四季折々の変化を十分に楽しみ、充実した毎日を過ごす。今の社会では頑張らないと生きられないが、所詮人間は機械ではない。いつもパワフール全開の状態で生きることができなく、きっといつか疲れる。その時自分の心は何処に宿るだろうか。お金や権力を持てば幸せになれるか。欲望には限界がないが、人間の命の長さが厳しく限れている一方、いつか失われてしまうかもしれない。その有限の生命をもって、無限の欲望を満たすことはあまりにも無駄である。たとえ、その欲望を満たしたとしても、それは悔いのない人生であろうか。欲望を満たすのはだめだと言っていないが、それは人生の究極的な意味ではないと思う。

明治期の文学といえば、夏目漱石や森鴎外がその代表者としてよく挙げられるが、私は賛成できない。勿論、『心』、『坊ちゃん』、『舞姫』、『高瀬舟』などの作品は素晴らしくて、私も愛読しているが、眩しいほどの樋口一葉のきらめきを前にして、どの文豪も光を失ってしまうと思う。貧乏の生活に苦しみ、艱難辛苦をしみじみと経験し、人生の本質を見抜いた一葉の作品に比べれば、ほかの作品はただ知識階級のうめき声に過ぎないと感じる。樋口一葉の作品の読解において、女性の悲しい運命がよく説かれている。しかし、私が読み取ったのは「成長」である。この世界は自分の思うようになれないよ、これは運命だよ、現実を受け入れ、妥協して生きていこうと悟り、理想や願望などを脱ぎ捨てるのは、「成長」である。『ゆく雲』の桂次も、『十三夜』の関も、未熟から成熟へと成長した。だが、自分の作り出した主人公たちと違って、樋口一葉は妥協しながら、自分の心の栖を求め続けている。それどころか、私を含む無数の人間の心の拠り所を作ってくれた。

さながら芥川龍之介が描き出した、汽車の窓から抛り出された暖かい色の蜜柑のように、日本文学は果てしない暗闇の中に、ひとつ明るくて、暖かい心の拠り所を作ってくれて、私が心身とともに疲れ切る時、慰めてくれる。日本文学は私の価値観の形作りに大きな影響を及ぼし、私の心の支えにもなる。これからも読みながら人生の価値を探究していこうと思う。

「私と日本」

上官雪妍　（長安大学）

私と日本の絆は、ある歌との出会いから始まった。

「今日も誰かが巡り会う

遥か 遥か 西の街

恋をするなら 御堂筋から

始まるのさ

雅なる 物語」

高校２年生の時、偶然にこの「大阪ロマネスク」という歌を聴き、私はその美しい旋律と歌詞に引かれた。ネットで調べてみると、この歌は、「関ジャニ∞」という日本のアイドルグループが歌っているということを知った。あの時から彼らの他の歌を聴き、いろいろなバラエティー番組を見、関ジャニ∞のことがもっと好きになり、日本という国にも憧れを抱き始めた。

関ジャニ∞のメンバーたちは、いつもわちゃわちゃしており、まるで家族みたいに仲がいい。悲しい時も、疲れた時も、彼らが私に勇気と希望をくれ、いろいろな困難を乗り越える力を与えてくれた。彼らの言語が分かるために、大学で日本語を専門として勉強することにした。この２年間、勉強するにつれ、私は日本語だけではなく、日本文化や歴史にも興味を持つようになった。そしてメンバーたちは全員関西出身であるため、私も関西弁に興味を持ち始めた。標準語とは異なる体系を持っており、発音もアクセントも非常に面白いと思う。関西弁についての本もたくさん買い、結構楽しんで読んだ。普段も彼らの冠番組をたくさん見、ラジオ放送を聴き、日本語をもっと上達できるように頑張っている。しかし、日本語をマスターすることは簡単ではない。単語や文法がどうしても覚えられない時、落ち込んでしまったこともある。だがどんなに辛くても、彼らの明るい笑顔を見ると疲れも吹き飛び、元気も取り戻せる。だからこそ、日本語を学び続けることができる。

この４年間、彼らに会いたい気持ちがいっぱいで抑えきれなく、今年のドームツアーの日程が発表された時、私は悩んだ末、関ジャニ∞のコンサートに行くことを決めた。

航空券とコンサートのチケットの料金を貯めるために、一生懸命アルバイトをした。そして今年の夏休み、やっと念願の大阪に行き、自分の目で日本を見た。彼らが生まれて育ったその土地に立ち、彼らが歩いた道を歩き、本当に感動した。御堂筋、心斎橋、梅田駅、難波、戎橋など、「大阪ロマネスク」という歌の歌詞に出る場所を全部観光した。そこでいろいろな地元の人も出会い、関西人の親切で豪快でさっぱりした性格を実感し、この町、この国がもっと好きになった。そして、人生初のコンサートに行った。私がずっと遠い存在だと思っていた人たちが自分の目の前で輝いており、それは本当に夢のようだった。現場で、おなじみの「大阪ロマネスク」を聴き、涙が止まらなかった。最初は、彼らと私は山を隔てて、海を隔てて、一時間の時差を隔てていると思ったが、京セラドームで隣に座っていた日本のファンと手を繋ぎ、55,000 人と一緒に「最高で、最強の関ジャニ∞！」と叫んだ時、私たちには、実は何も隔てていないと初めて感じた。言葉と文化の壁があっても、愛さえあれば、全然問題ない。今はもう「アイドルと一般人の私が住む世界が違う」とは思わない。違う国に生まれ、違う環境の中で生きてきたといっても、みんなが同じ空

の下で繋がっている。そして彼らが言ったことをすべて分かったことに気付いたとき、本当にうれしかった。なぜかというと、この長い間、一生懸命日本語を勉強して、努力した甲斐があったからだ。

私にとって、日本語はもっと広い世界への扉を開けられる鍵だと思っている。期待、感動、幸せ、これはすべて日本語が与えてくれた大切な絆だと思っている。この出逢いと絆に心から感謝している。関ジャニ∞のおかげで、日本と会え、本当によかった。

自分が選択した道だから、一度も後悔したことはない。これからも一生懸命日本語を勉強したいと思っている。そして来年は、日本に交換留学する機会があるので、この１年間の勉強を通じ、日本と日本人についての理解をより深め、自分の国際視野を広げ、知識を増やし、精神力を鍛え、日本語のレベルをアップを図りたいと考えている。将来も、日本語を習得するとともに、文化、社会、歴史などの様々な面について積極的に学び、その成果を生かして、異文化間の対話と相互理解を深める架け橋になりたいと考えている

「私と日本」

鄒文嘉　（四川外国語大学）

いつからか、私は一人でいるのが好きになった。なぜなら、私は内向的な性格であり、また、そんな私の事を誰も理解できないから、と思っているからだ。

道を歩いているとき、人々の微笑みを見ても、自分の人生は平凡であるし、失敗の連続だから人生の出口が見つからないと思ってしまう。旅行や音楽など、普通の人たちが楽しいと思う事をやってみても、残念ながら、なんの役にも立たなかった。自分は幸せを感じる能力さえもなくなり、幸せという温かいものは、私にとって重い負担になってしまったと感じていた。

ふとある時、なぜか太宰治の作品を読みたいと思い本を探した。友達は、「日本の小説を読めば読むほど憂鬱になるぞ」と冗談半分で話してきた。しかし私は、孤独から抜け出すのではなく、私のことを理解できる人を探したいという思いから、日本の本を読もうと思った。

「人間失格」を読み始めてから、私と日本の小説家である太宰治との間に強い絆がある

と感じるようになった。

「弱虫は、幸福をさえおそれるものです綿で怪我をするんです幸福に傷つけられる事もあるんです。」

その本は剣のように自分の心を直撃した。確かに幸せなんて、私には高嶺の花のようなものだ。人情世界に生きている私たちは絆だらけだが、人間はやはり独立な個体として、永遠に孤独から抜け出せないものである。昔から信頼していた先輩や友人たちが、彼を狂人として見捨てていくのだから、太宰治は人生と社会に対して徹底的に絶望し、自分が人間としての資格を失ってしまったことを痛感した。その時、彼は私の精神的な知己だと思った。

しかし、私はまた、迷い穴に陥った。一年後にもう一度「人間失格」を読んでみると、太宰治の孤独は私の孤独と大きな違いがある事に気付いた。彼は必死に周囲の社会に溶け込みたいと思っていた。

彼の言う通り、「僕が早熟を装って見せたら、人々は僕を、早熟だと噂した。僕が、なまけものの振りをして見せたら、人々は僕を、なまけものだと噂した。僕が小説を書けない振りをしたら、人々は僕を、書けないのだと噂した。僕が嘘つきの振りをしたら、人々は僕を、嘘つきだと噂した。僕が金持ちの振りをしたら、人々は僕を、金持ちだと噂した。僕が冷淡を装って見せたら、人々は僕を、冷淡なやつだと噂した。けれども、僕が本当に苦しくて、思わず呻いた時、人々は僕を、苦しい振りを装っていると噂した」

以上の経験がないと、幸福に感謝する謙虚な気持ちさえも湧き起こらないのだろう。幸福とは自分に満足していて、自分の人生を肯定できることだからだ。私はまだまだ必死に生きてはいないことが分かった。

では、私の孤独は何なのであろうか。中国の作家、贾平凹はある言葉を言った。

「たくさんの人は自分の孤独に文句を言って、孤独を言い出した人は実は孤独ではない。本当の孤独は神聖だ。太宰治の孤独は神聖だ。一方彼は現実の堕落と肉体の苦痛を深く耐え忍んで、一方では一生懸命に文章を書き、醜い現実を暴いて、純潔な理想の世界を一生追求し、積極的に心の檻を突き破っている。神聖な孤独とは、たとえ心が傷だらけでも、諦めない孤独だ」と。

これを聞いたとき、悟ったと同時に非常に恥ずかしい気持ちになった。自分の孤独は孤独とは言えず、ただ自分の心は狭すぎて、失敗した後に無念な気持ちになったり、臆病になるだけだ。また、日本の他の文学者の小説を読んでみた。川端康成の「夜なかの四時に目がさめた。海棠の花は眠っていなかった」。人間の個体はちっぽけで、平凡だが、私たち

は生きている。ちっぽけな命で一生懸命に生きていて、美しく生きて、まるでこの小さな輝きの咲く花のようだ。孤独は美しいものだ。夏目漱石の「のんきと見える人々も、心の底をたたいてみると、どこか悲しい音がする」。悲しみは孤独を伴う。

私は孤独ではなくて、一人でいることができないだけだ 。これこそ私の不幸なことだ。悲しい事に、産まれて二十年経って、自分には何もないことが分かったが、私はとても幸せだ。原点に戻って、進む道が見つかった。積極的な気持ちを持ち、簡単に諦めず、孤独を楽しんでいくことが大切だ。

日本の文学作品を通じて、正しい人生の方向を理解でき、私を成長させた、このことに感謝の気持ちを伝えたい。最後に先生から教えてくれたある言葉を言いたい。「人の一生は、憎しみの中で苦痛にもがいていて、逃げようとする人がいなくて、我慢して我慢して、この俗世を積極的に愛して、この俗世を恨んで、一生楽しんでください」。

「私と日本」

徐暁瀛　（上海海事大学法学院）

気が付いたら私はクラスの「日本通」だった。

そして、私は疑問に思った、「私は何時から日本を意識し始めたのだろう。」

小学生の頃、テレビでは国産の抗日アニメとドラマが毎日放送されていた。子供は大人の鏡。私の周りの子供達は、日本と日本人の事を理由もなく嫌って、からかい、時には馬鹿にしていた。大人はその様子を見てただ微笑む、私はそれが子供達の行動を賛同しているようにしか見えなかった。

中国、日本、アメリカ、幼い私がテレビや大人の会話で聞こえる国はこの三つだけ。強いアメリカ、スゴイ中国、そして憎らしい日本。

「何故大人は日本がそんなに嫌いなんだろう。」

多分その頃からかな、私は日本に好奇心を持ち始めた。旅行に行ってもいない、日本人の一人や二人も知らない。ただ印象で日本全体にレッテルを貼る行為に少し不公平な感じ

をした。私は歴史を否定するのではない、むしろ歴史は大切な物だと思っている。ただ大人が日本に対する先入観で子供たちの感情を過剰に誘導するのはどうかと思った。正しい歴史教育は必要だが、憎しみを煽るのはやり過ぎだと思う。

中学生になるとテレビで抗日アニメやドラマをあまり見なくなった。周りの友達やインターネットでは誇張な抗日物を嘲笑って、馬鹿にしていた。数年前抗日の雰囲気が夢のように一瞬で消えていった。

当時若者の中では日本の亜文化が物凄いスピードで流行った、その中でコスプレ、お宅アニメとゲームは特に人気があった。そして、この社会現象は『人民日報』と『環球時報』（中国の主流の日報）は見逃していなく、何度も全面報道していた。私からすると、あれは普通の報道ではなく、警告に見えた。

私はその時受験勉強のため色んな雑誌を読んでいた。『読者』、『青年文摘』、『意林』、この三冊は先生が進めてくれた主流の雑誌だ。

主流の雑誌には日本関連の文章も載っている。「日本の町はキレイだ」、「日本人は礼儀正しい」、「日本人は全体主義で団結力がある」、「日本人の民度は世界一」、私の記憶が間違っていないならば、当時日本に関しての文章は全て日本を褒め称えていた。

そして、中国、日本、アメリカ以外韓国、カナダ、イギリス、その頃から色んな国が耳に入り始めた。

「日本は遠い不思議な国。」

皆の言葉に存在する日本は完璧で、そこで生活している人々はまるで苦痛や悲しみを知らない。私は日本がショッピングモールに売っている高級なお菓子にしか見えなかった。今思うと、高い、遠い、神秘で天国のような「日本」は中国人の想像にだけ存在する架空の国。

私は益々日本の事を知りたくなった。

受験を終え、高校生になった頃、誇張な抗日物は私が見るテレビから既に消えていた。

韓国のアイドル、アメリカのスター、勿論日本の声優や役者さん、それから中国の漢文化。高校生の皆の視野は中学時代より広く、そして物事を冷静に見るようになったのである。成人を迎えた私達は初めて中国人である事にプライドを持ち始めた。

私は日本の事を知るため、NHK のドキュメンタリーや日本のニュースを見始めた。痴漢問

題、ニート、草食男子、過労死、少子化、格差社会、私は『読者』に載っていない日本が見えた。

　そう、日本は完璧な国ではなかった。敬語が使えない若者、東京のホームレスが集まる地区、働けるのに働かないニート、日本は色んな問題を抱えていることに気づいた。アメリカ、韓国、中国と一緒のようである。日本は中国の普通のお隣さん。

　私は初めて日本に手が届いたように感じた。

　さらに、大学に入ってから、自分を客観的に見つめることができ色んな疑問の答えが見つかった。

　私達日本を使って逃げていた、自分では立ち向かえない劣等感から。発展途上国の私達から見る世界は輝いて、まだ輝きが足りない自分たちをうけいれられなかった。隣国の日本に感情をぶつけることで自分を楽にした。

 小学校の頃、自信のない私は優越感に浸りたいがため、隣国日本を嘲笑い、ナショナリズムの感情に逃げ込んでいた。

　中学校の頃、自信のない私は自分の事を嘲笑い、現実から目を逸らし、過剰な熱意を隣国に捧げた。

　高校になった私達は初めて自分を受け入れる。どの国にもいい人もいるし、悪い人もいる。中国は発展途上国だが誇れるところも沢山ある、日本はごく普通な国、極端な感情は非合理的。

　そして、私は思う、「いまでしょ！」と。

　両国の信頼と友情は優越感や劣等感から生まれない、平等の立場しか真の友情を生み出せない。国民もそうだ。

　優秀で普通な国日本とは、私の友達であり、先生であり、青春であり、好奇心のシンボルだと思う。

「私と日本」

郭暁麗　（大連工業大学外国語学院）

日本語を勉強してから始めて、日本語、日本との出会いも始まりました。考えてみると私と日本との出会いは本当にすばらしいものです。桜が美しくて天真爛漫で、桜を愛する日本も神秘的で魅力的な国です。日本について知れば知るほど、この国に惹かれ、好きになります。中国と日本は近い近隣で、歴史上の源もあり、私たちの祖先はさらに親密に友好的な付き合いがあり、だから、中日両国は多かれ少なかれ似ているところを持っていると思います。

日本に対して、わたし個人の感情としては愛と憎しみ両方持っています。一面において、同じアジアの隣人、日本は国際において経済、文化などいろいろな面においても一席を有していると思います。なぜかわからず、中国人としての私も誇りを感じるようになります。国際試合で日本人の出場があれば、いつも心から応援し、もし、優勝したら、心からうれしく思います。一方、歴史を振り返って侵略戦争などで苦しんで亡くなった中国人のことを思い出したら、また、心からの憤慨があります。

確かに、私たちは新しい時代にいて、以前の戦争の過ちを考えてばかりはいけないと思います。中国人もずっと恨むことがいやで、戦争を経験しない我らにとって、歴史は警戒でもあり、動力でもあります。小さい時に教育されたのは「国が強くなってからこそいじめられない」ということです。東方の人が人に与える印象は多分謙遜で粘り強いかもしれません。それは伝統文化の影響を受けて、多くの人の信奉するものは「徳を以て恨みに報いる」で、これが闊達な胸だと思います。だから、中国人は心より平和を愛しています。

もちろん、多くの人が平和を愛していると思います。このごろ、私の学校で行われた中日平和友好条約 40 周年を記念して、池田大作の中日国交正常化提案 50 周年になりました「新時代の民間交流」という中日友好フォーラムが開かれました。多くの人が両国の平和のために黙々と捧げていると感じて、彼らの情熱は私を感動しました。現在大連に滞在している日本人は 6 千余り、私は日本に行く中国人の一人になりたいと思っています。中日友好を促進することが幸せな事業で、その前に、日本語をマスターして、基本的なコミュニケーション能力を身につけなければと決意しました。

時に、日本と中国は喧嘩しながら密接な関係を持っている兄弟のように、切っても切れない綱がりがあると感じられます。私と私の妹のように、矛盾があって冷戦をしますが、お互いの感情があまり変わらないので、後は再び仲よくなるができます。そして、何度喧嘩してもずっと一緒に寄り添って人生の最後までいくことできます。日本も、中国と兄弟のようにお互いに助け合い、共同で未来の長い道を歩んでいけますようお祈りいたします。